

谷村 雅子

(Tanimura Masako)

医学博士。国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長。



成育医療センター研究所
成育社会医学研究部部長

1972年、日本女子大学家政理学科卒業。東京医科歯科大学人類遺伝学教室助手、米国テキサス大学遺伝学センター研究員を経て、1987年より現研究所（旧国立小児病院小児医療研究センター）にて、環境と遺伝の両面から小児の健康・発達を研究。特に、メディアの影響、児童虐待、小児がん、遺伝性腫瘍など。

日本小児科学会子どもの生活環境改善委員会委員。

赤ちゃんはヒトに興味をもつ

—赤ちゃんの対テレビ行動の解析より—

実験的にはヒトは新生児期から笑顔で自分に視線を向けるヒトに関心をもち、視線が逸れると関心が低下することが報告されているが、乳幼児は何に最も関心をもっているのか。

我々は、プレイルームで、種々の番組をつないだ12分の呈示ビデオを流し、12組の11～24か月児と親の行動をビデオ記録し、呈示ビデオ全66場面の属性との関係を解析した。その結果、子ども達はヒトが視聴者方向を向いて笑顔で登場している場面を良く見、横向きであると見ないことが示された。また、ヒトの動作や言葉を模倣し、その後で親の顔を振り向いて見ていた。これらの結果は、乳幼児が画面のヒトに興味を持ち、ヒトの真似をし、親に共感を求めることを示唆している。

3～24か月児1600名のテレビ視聴についての実態調査に記載された好みのCMを録画し、前後に放映されたCMと内容を比較した。その結果、乳幼児が好むCMは登場人物が視聴者方向を向いて笑顔であること、CMの最初に子どもの声が聞こえることが示され、テレビ画面から流れる多量の情報の中で、乳幼児は自分に笑顔の視線を向けるヒトに関心を示すことが示唆された。

多くの乳幼児に視聴されているビデオを成人10名に視聴してもらい、前頭前野の脳血流をNIRSで計測した結果、登場人物が視聴者方向に働きかける場面で活性していた。自分への働きかけは新生児期から成人に至るまで重要なことであると推察される。

日本では核家族化、少子化、父親の帰宅時間の遅延などが進み、親子の接触時間が物理的に減少している。その上、テレビ・ビデオの他、インターネット、携帯電話などの映像メディアが普及し、子どもの対人経験が減少している。そのためか、日本では近年、言語や社会性の発達が遅延化している。世界的にIT化が進む現代社会においても、子どもは自分に笑顔で働きかけるヒトが好きなことを、家族も社会も認識する必要がある。